

北白川追分町遺跡出土の縄文土器

—北白川C式の成立を考える—

富井 眞

1 はじめに

1923年に濱田耕作によって発見された北白川追分町遺跡は、中期末の竪穴住居跡、後期の配石墓・甕棺墓、晩期の低湿地埋没林、が確認されるなど、縄文時代の土地利用の研究にとって重要な遺跡として広く知られている（図55）。また縄文土器編年の研究という点からも、中期末では北白川C式の標式遺跡として⁽¹⁾、後期縁帯文土器の段階では北白川上層式1期の基準資料を提供した遺跡として⁽²⁾、晩期後半の突帯文期では滋賀里IV式と滋賀里Vを層位的に分離できた遺跡として⁽³⁾、それぞれの重要な位置を占めている。

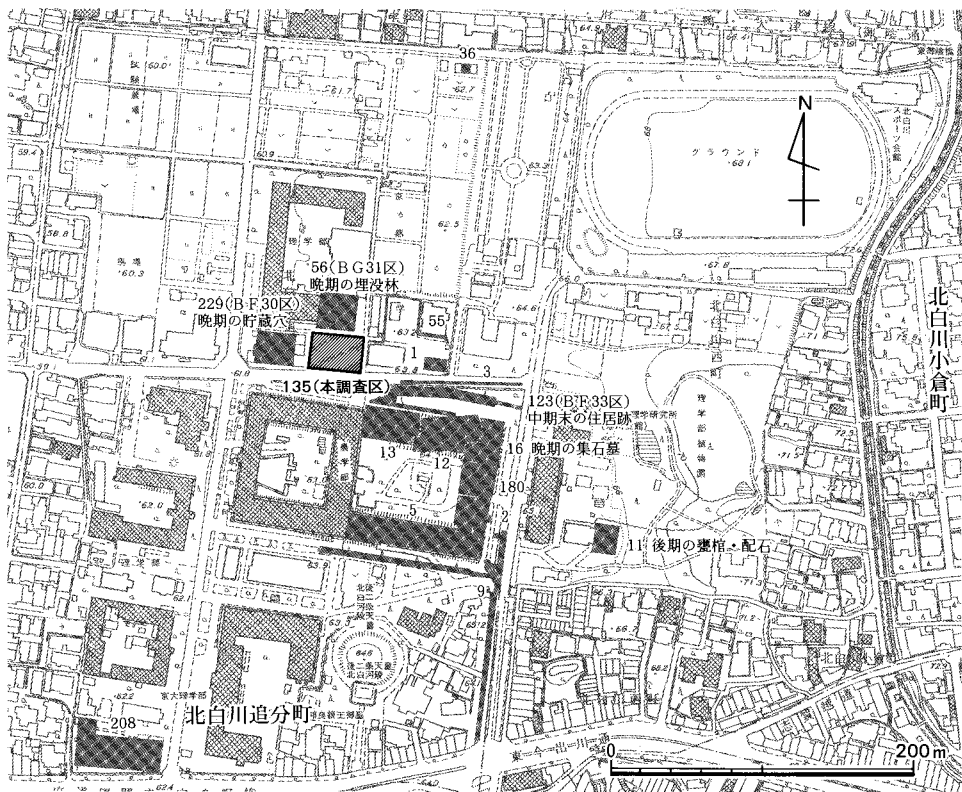


図55 北白川追分町遺跡の主な調査地点 縮尺1/5000 (番号は図版1に同じ)

2 遺 物

ここに紹介する土器は（図版30～33，図56～64），昭和58年度に京都大学北部構内のほぼ中央にあたる135地点を発掘調査した際に出土したものである（図55）。出土した6,000点を超える縄文土器では中期と晩期が多数を占めるということは⁽⁴⁾，既に概要で報告されている⁽⁵⁾。このうちから中期末のものをとりあげるのは，本報告第3章で報告が行われたBF30区(229地点)出土資料と比較検討するべく再整理を試みた折に，概要では報告されなかった資料の中に，近畿地方への影響が指摘される中部地方西部の土器と比較されるべきものなど編年研究上重要なものが含まれていることがわかったためである⁽⁶⁾。

今回の資料紹介は，近畿地方における縄文時代中期末の非常に華やかに装飾された土器群が成立した背景を地域間関係という視点から探ることにその目的がある。従って数多くの有文土器のうちで，この目的に適った資料および情報量が多い破片資料を，土器組成を意識しながら選択することにした。今後は定量的検討の要請も生じるかもしれないが，ここでは従来あまり細かく検討されなかった，近畿地方の東のどの地域との関係が何にうかがえるかということを示すために，敢えて定性的なアプローチを採ってみる。

以下、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』で行われた分類に準じて記述する⁽⁷⁾。

深鉢A類（1・2・8～31） 深鉢A類は，口縁下にすぐ口縁部文様帯のくる，水平口縁もしくは主文様部が波状を呈する深鉢である。その中で，口縁部と胴部とを隆帯で区分する1・2・8～22は深鉢A1類ないしA2類にあたる。そのうちで主文様をもつ1・8～16では，1・8～13は主文様部と区画文様部とを隆帯で分離している。1・9は主文様が渦文にならずにそこに区画文が入り込んでおり，大杉谷式と同様の構成をとる。しかし，1は縄文が充填されている点か，9は口縁部と胴部とを区分する隆帯の下に横位展開する多重沈線が巡る点か，それぞれ大杉谷式とは異なる。8・10も口縁部と胴部とを区分する隆帯の下に横位展開する多重沈線が巡る。区画文様部が無文の11は，口縁部下も無文になるようである。これを頸部無文帯と考えるならば，神明式にも類例を見つけることができよう。12は，胴部上半の横走る多重沈線が渦文を描き，その下に縦位の区画文が見られる。口縁内面には，1と同様に縄文が巡る。14～16は主文様部と区画文様部とを隆帯で区分しないものである。16は，口縁部と胴部とを区分する隆帯が2条である点や，縦位の区画文を胴部中程で横位に連係させた下半に沈線施文が及ばない点，そして縄文の後に沈線が施されている点などの特徴は，当遺跡では類例が少ない。2・17～22は渦文などの

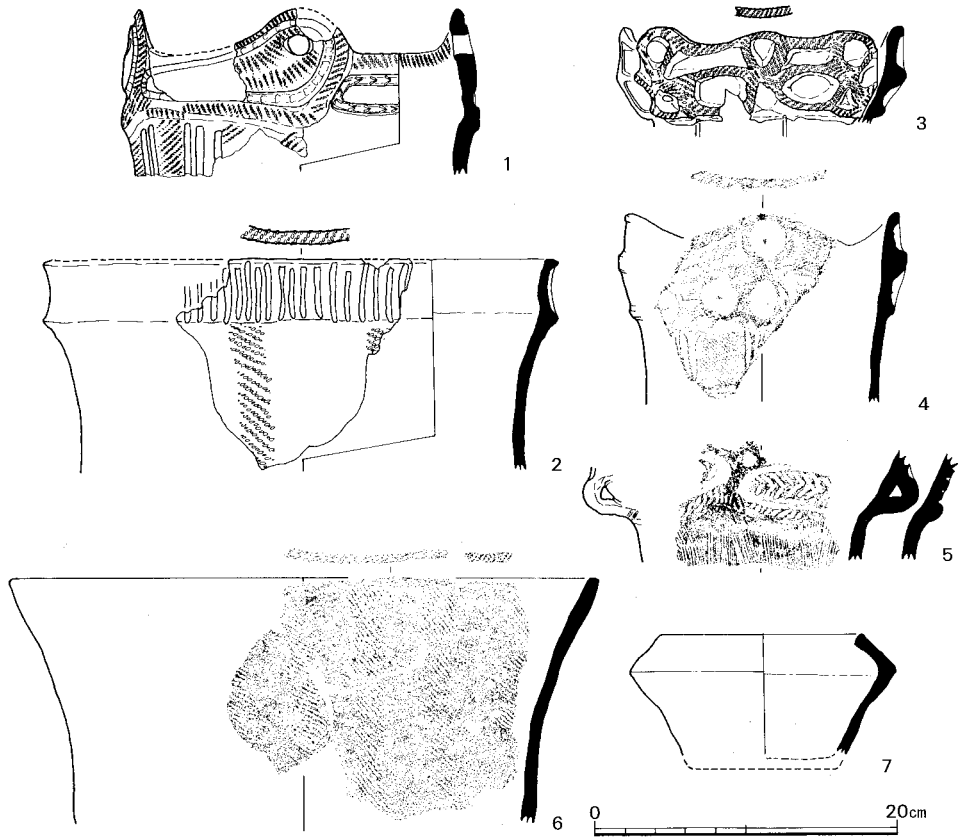


図56 135地点の土器(1) (1・2 深鉢A類, 3～5 深鉢B類, 6 深鉢D類, 7 浅鉢B類) 縮尺1/5

明確な主文様が確認できないものである。ただし19～21は区画文様部の一部という可能性も残る。23は口縁部と胴部との境が屈曲するA 3類で、器壁が薄い。文様意匠や沈線内の円形刺突などは平式の特徴を備えている⁽⁸⁾。24は口縁部と胴部とを多重沈線で区分するA 4類。25は22と同様の文様意匠だが隆帯による区分が確認できず、A 4類と思われる。26は文様帯の相違だけで口縁部と胴部とを区分するA 5類。27～31の胴部では、27はA 1類ないしA 2類、28はA 3類ないしA 5類、29～31はA 1類ないしA 2類あるいはA 4類である。ただし、31は文様意匠からみて深鉢C類の胴部の可能性もある。

深鉢B類 (3～5・32～38) 深鉢B類は隆帯で楕円形区画文を横に連ねる文様を施す深鉢である。5・32～34は楕円形区画文のつなぎ部が橋状把手となるB 1類。5の胴部は櫛歯状工具による条線のみで、沈線施文は認められない。32は神明式に特徴的な透かしを多用する深鉢の透かし部。胎土や焼成は神明式のものによく似ていて、搬入品と



図57 135地点の土器(2) (8~16深鉢A類) 縮尺1/3

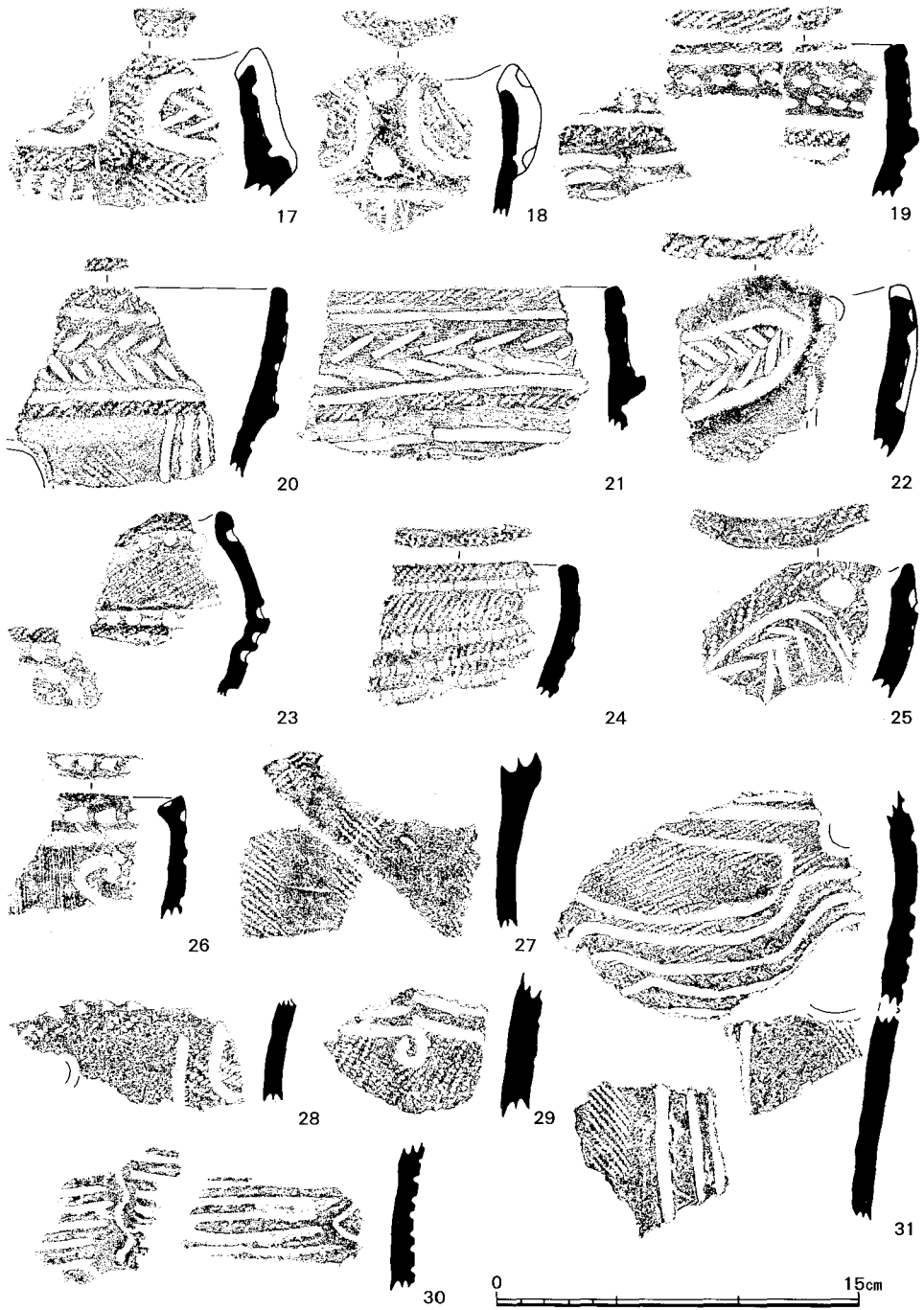


図58 135地点の上器(3) (17~31深鉢A類) 縮尺1/3

思われる。橋部が板状の33は、胴部の縦位の区画文の上端が沈線で連結されている。34は5と同じく紐状の橋部の上部に凹点が付される。3・4・35～38はつなぎ部が突起となるB2類である。3・4は、32のような透かしを多用する深鉢の橋部が隆帯による表現になったもの。35は、つなぎ部がつまみ状のものでは珍しく楕円形区画文の上に沈線による文様がある。36は文様意匠や器形は34に酷似するが、口縁内面に縄文を有する。37では楕円形区画文内に充填文様が見られない。36と同じく口縁内面に縄文をもつ38の楕円形区画文は凹点で表され、胴部文様は帯縄文のみである。この構成は有文浅鉢の50のそれに近い。

深鉢C類 (39～45) 突起状の山形口縁をもつ深鉢。39は台形の波頂部が筒状になり、内面に凹点をもつ。「S」字の主文様を刺突が取り囲むという文様意匠は、当遺跡ではあまり例がない。深鉢C類で内面に凹点をもつものは、土器の内面という目立たない部分の特徴であるにもかかわらず東海地方西部から近畿地方中央部に広く分布しており、広域編年の鍵となる。40～44は磨消縄文が定型化していない段階のもので、屈折部上面や波底部の文様意匠の各要素には型式学的な差異を確認できるが、口縁部文様帯と胴部文様とを多重沈線で区分する点は共通しているようである。なお、43は他と異なり、縄文の後に沈線が施される。45は磨消縄文の定型化が進んだもので、屈折部が顎状に強調される。

深鉢D類 (6・46～48) 縄文だけで器面を飾る深鉢。6は中期末に近畿地方一帯に広く盛行し後期初頭にも一部時期が下ることのある、全面帯縄文の深鉢。口縁部の横位縄文はないが、天理式の範疇に含めても許されよう⁽⁹⁾。44～46は外面が全面横走縄文のもので、口唇部に縄文があるものや口縁内面に縄文をもつものなど、様々なものがある。里木Ⅱ式とのつながりを考えると口縁内面に縄文のあるものが古いのかもしれない。

浅鉢A類 (49～61) 口縁部が内湾ないし「く」字形に屈曲する有文の浅鉢。49～52は主文様部ないし単位文様部が隆帯で囲われるもので、深鉢A1類の1・8～13に対応する。主文様部が波状を呈する49・52の内面にはともに明瞭な稜が巡る。50・51は水平口縁で単位文様が連なるものと思われる。51は口縁部文様帯を隆帯で区画してそこに連弧文を配するもので、星田遺跡の深鉢と同様の構成をとることがわかる。53・54は主文様部と区画文様部とを隆帯で分離しないもの。55・56は区画文様部か主文様のないもので、56の胴部には縄文が横走する。57は深鉢A1類の2と同様の文様意匠の浅鉢で、これも胴部には縄文が横走する。58は区画文様部に充填施文をしていない。59は口縁部の屈曲が緩くなったもので、文様意匠は深鉢B類の34と類似する。無文部は丁寧に磨かれている。60・61は口縁部が内湾するボウル形に近いもので、磨消縄文の定型化が進んだものである。

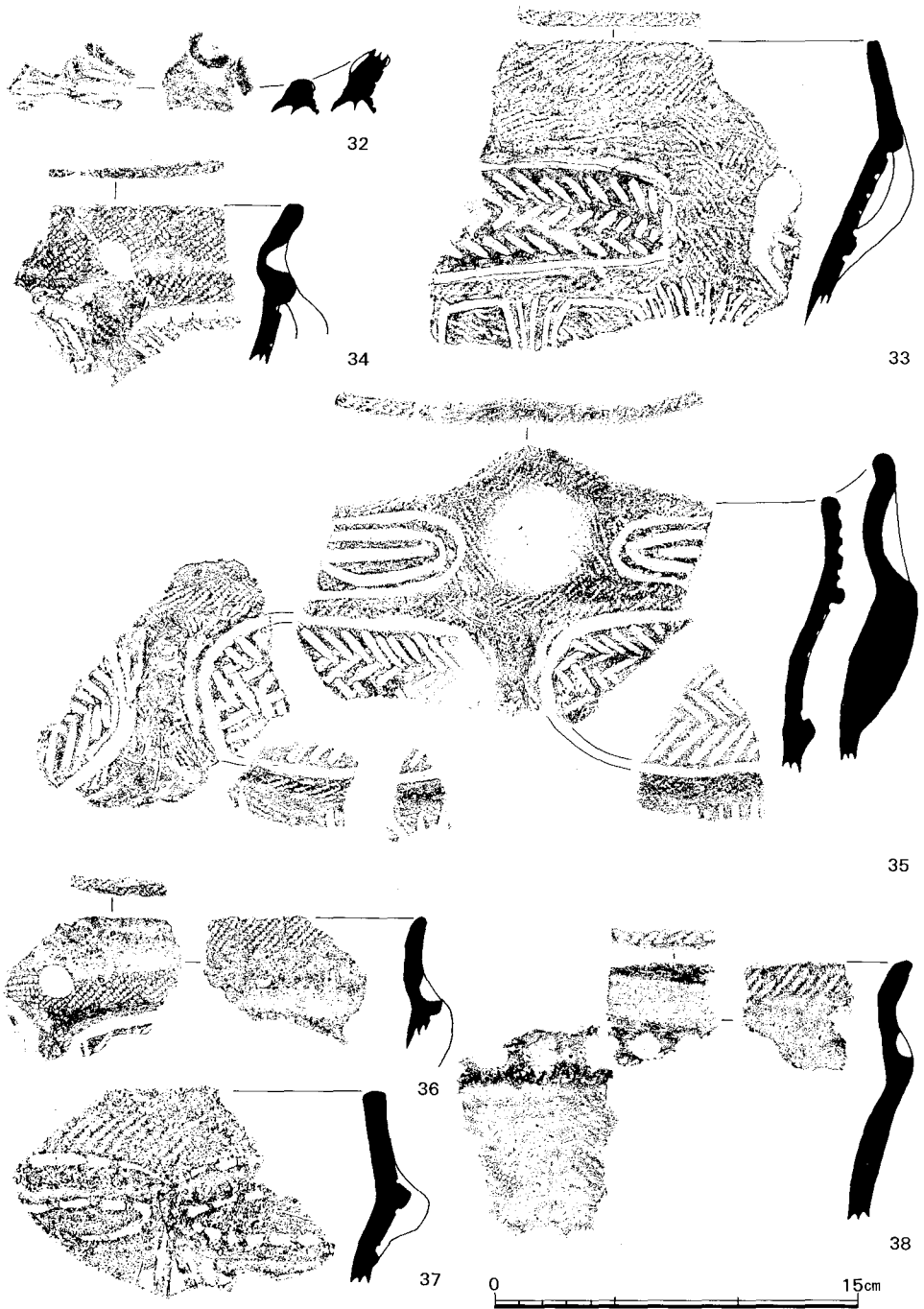


図59 135地点の土器(4) (32~38深鉢B類) 縮尺1/3

北白川追分町遺跡出土の縄文土器



図60 135地点の土器(5) (39-41深鉢C類) 縮尺1/3

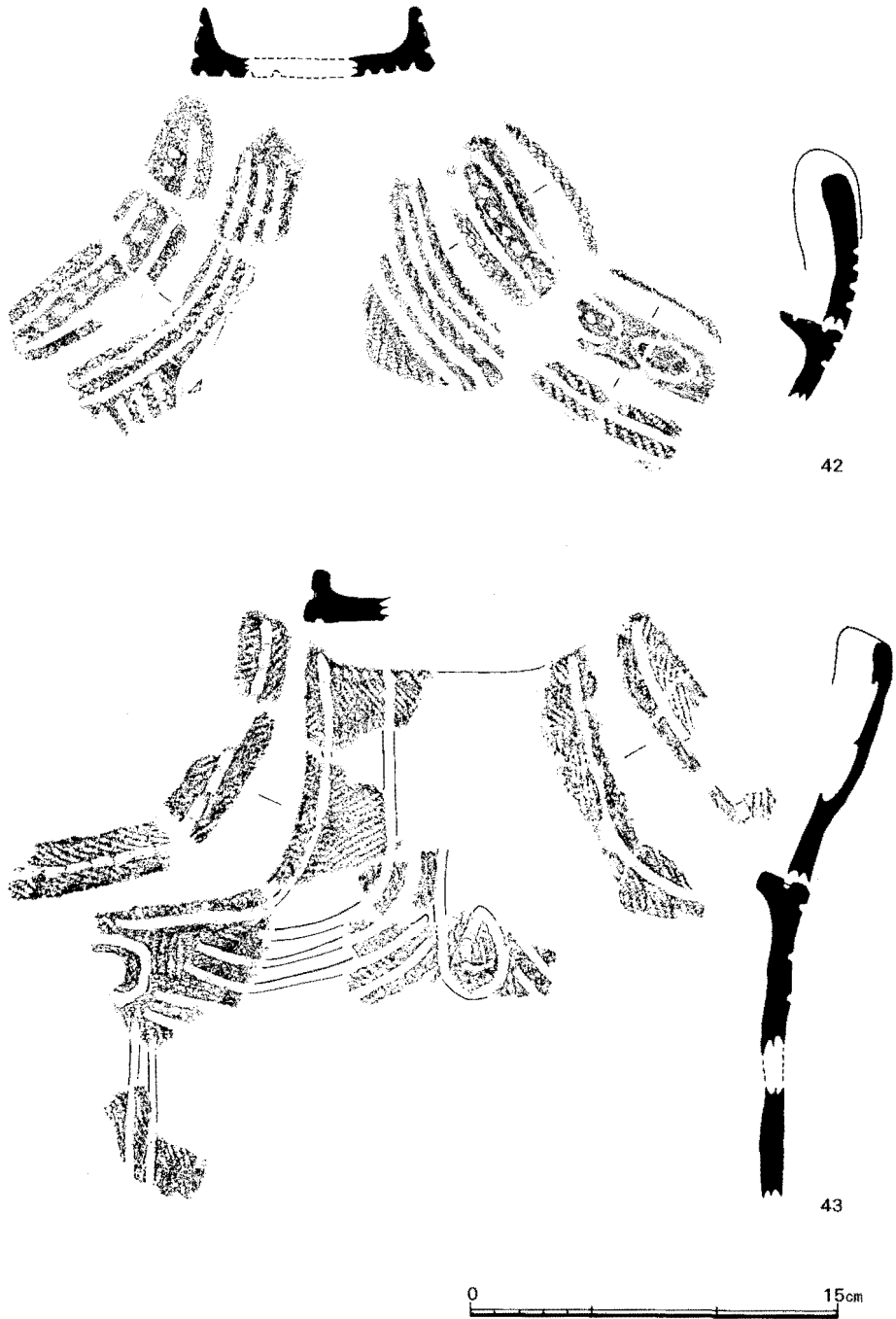


図61 135地点の土器(6) (42・43深鉢C類) 縮尺1/3

北白川追分町遺跡出土の縄文土器

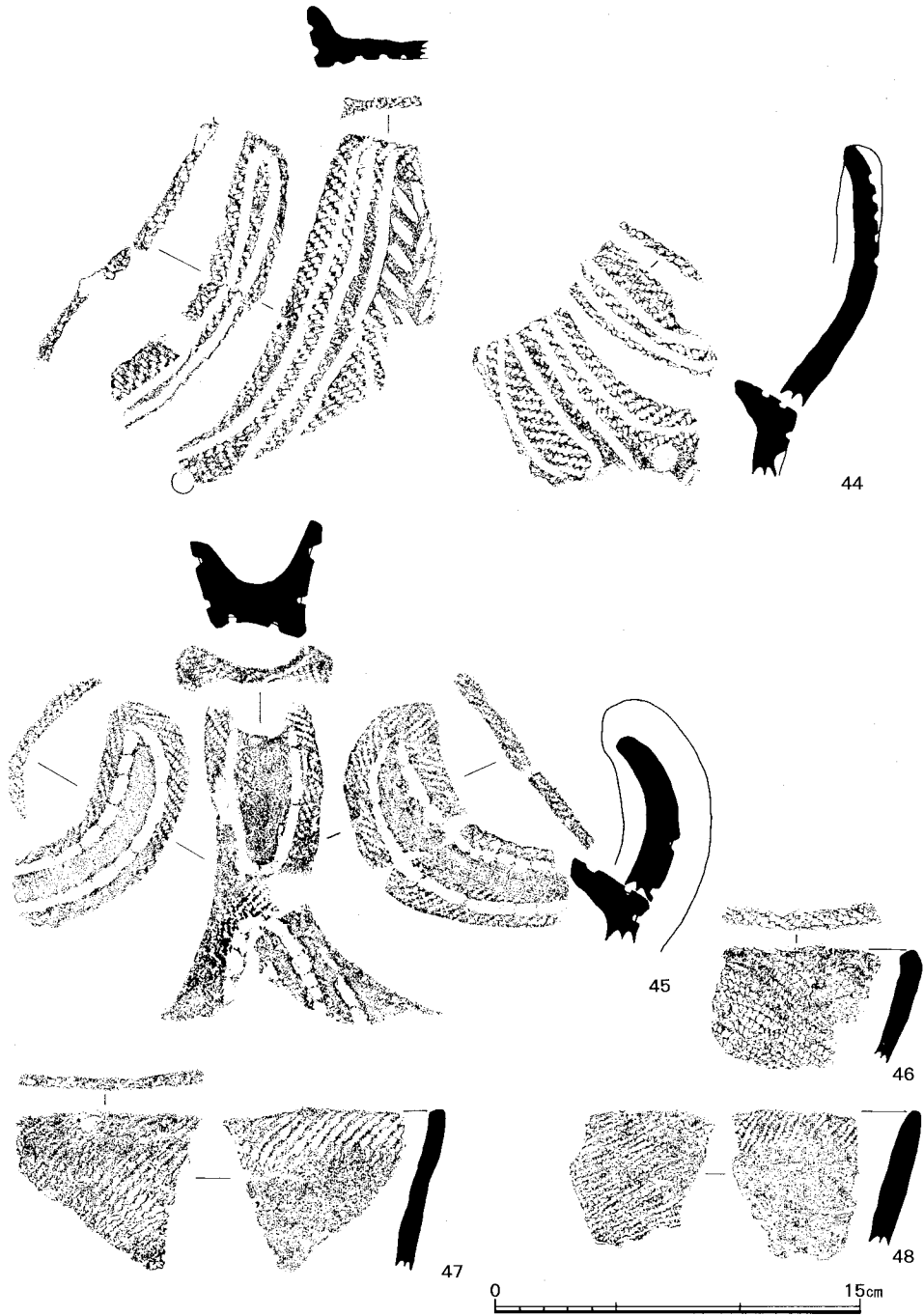


図62 135地点の上器(7) (44・45深鉢C類, 46~48深鉢D類) 縮尺1/3

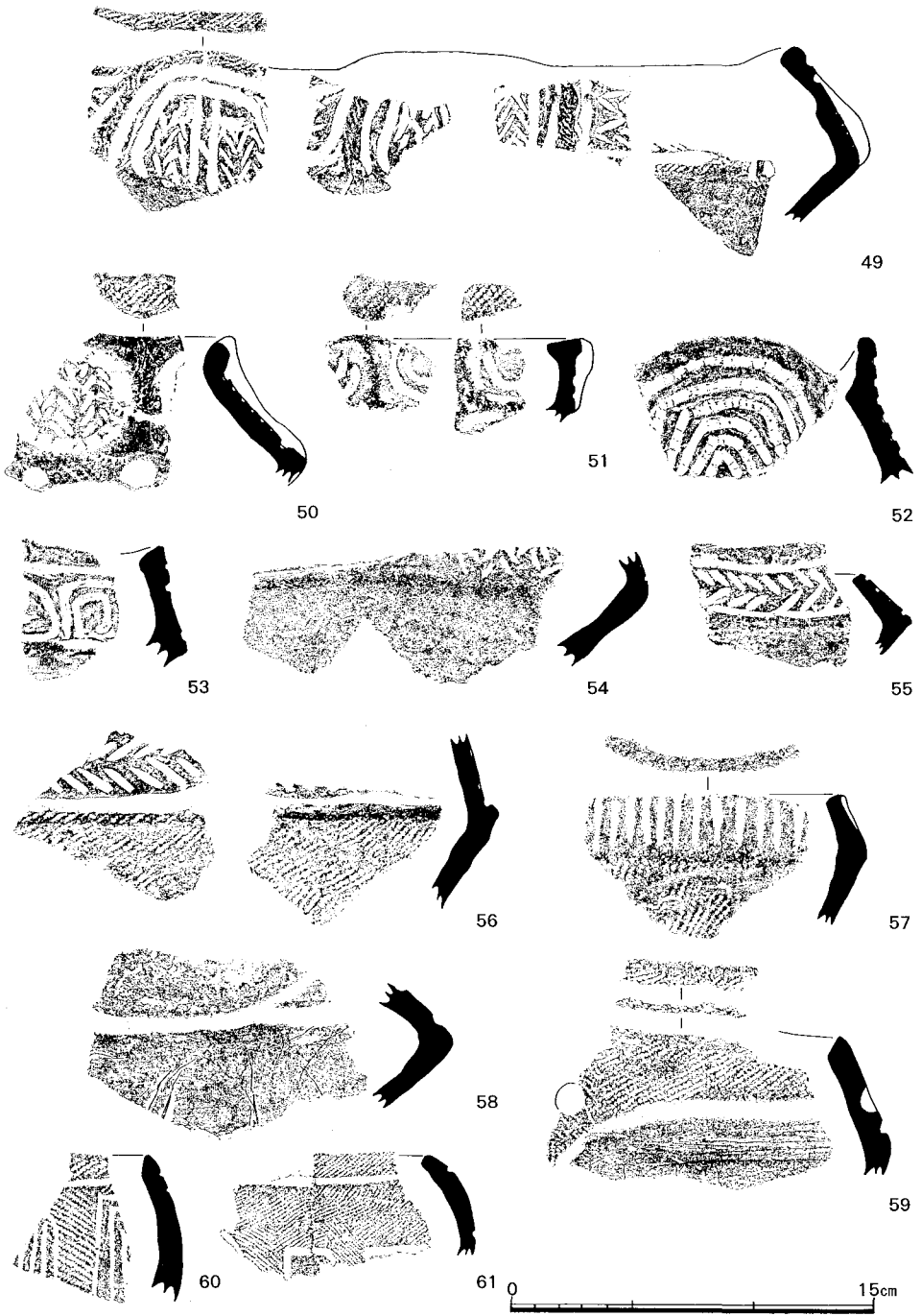


図63 135地点の土器(8) (49~61浅鉢A類) 縮尺1/3

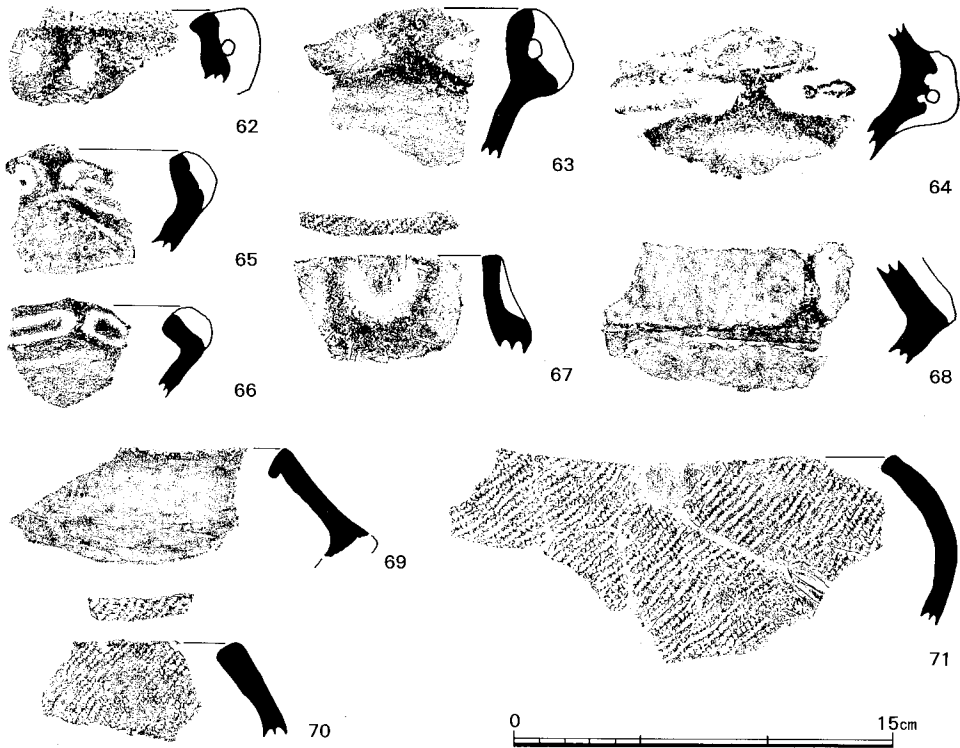


図64 135地点の土器(9) (62~71浅鉢B類) 縮尺1/3

浅鉢B類 (7・62~71) 口縁部が内湾ないし「く」字形に屈曲する無文の浅鉢。外面に縄文をもたない7・62~69のなかでつまみ部を有するのは62~68である。そのうち口縁部ないし屈曲部に橋状把手の付く62~64では、いずれもつまみ部を棒状工具で横位に穿孔することによって橋状にしている。65~68では、つまみ部の隆起が低く穿孔が見られない。7・69にはつまみ部が確認できない。これらの縄文をもたないものは、65以外は外面が磨きあるいは丁寧な撫でによって調整されている。外面に縄文をもつ70・71はともに内湾口縁で口唇部を面取りしているが、71の口唇部には縄文がない。

3 北白川C式の祖型と前半期の展開について

近畿地方の中期末の土器研究は、土器の文様や器形の多様性が著しいことに加え、中期後半の里木Ⅱ式からの変遷がスムーズに辿りにくいこと等の理由から、『日本の考古学』(河出書房 1965年)以後しばらくはあまり大きな進展をみなかった。しかし泉拓良が、1982年に当該期の近畿地方の地域分化を論じ⁽¹⁰⁾、続いて1985年には北白川追分町遺跡の土器

を基に中期末の北白川C式を再設定してその枠組を示したことによって⁽¹¹⁾、研究は大いに進展し、またこの型式も縄文土器研究において十分な市民権を獲得した。

さて、北白川C式はその設定当初から4期に細分されていたが、泉自身が案じていたように、2期と3期の細分の可否や3期と4期とのギャップなど、幾つかの課題はその後の研究に託されていた。また、北白川C式の祖型ないし成立の契機となるものについても、当時は唐草文系の土器の一挙的流入というかたちでの指摘に留まらざるを得なかったようである。しかし、資料がその後に飛躍的に増加してもなおそれらの課題が克服されたとは言いがたい。この原因には、良好な出土状態を提供する遺跡が少ないことや、この型式にみられる文様意匠が甚だ多様であることなど、資料の性格に帰する点もある一方で、編年の際のカテゴリー基準や新たに得られた資料の見方といったものに多少の困難を帯びていたことにもあると思われる。すなわち、前者では、深鉢A類の変遷については2期と3期の細分の可否を別にすれば肯首できるものの、深鉢B類・C類の細分については必ずしも時間差を示すとはいえないような文様意匠の違いや施文技法の差異が時期区分の基準になっていたと思われることである。これは、この型式の設定以降に得られた資料が北白川C式の何期のものかということがなかなか明記されずにいることに現れている。後者では、文様意匠や施文のあり方などを微視的に捉えようという動きがあまり活発でないことである⁽¹²⁾。

そこでこうした北白川C式編年研究の現状に鑑み、今回紹介した資料のうちで代表的器種である深鉢の前半期のものについて、他遺跡の資料も補ってその祖型や系譜について若干の考察を試みる(図65~67)。なお以下の本文中の番号は図65~67のそれに対応する。

深鉢A類 深鉢A類ではその基本的なものであるA1類の口縁部と胴部上半の文様を主に扱うが、泉の細分が大筋として妥当であることは先に触れた通りである。さて、北陸地方西部の神明式には咲畑式の変容した1・2などが、神明式一般にみられる16のような透かしを多用するものと共伴する。2の文様意匠をみてわかるように、口縁部と胴部を刺突のある隆帯で分離して、口縁部に渦文、胴部上半に多重沈線、をそれぞれ配するという構成は6など伊吹山地地域にも類例を見出せる。7(図57の9に同じ)は隆帯上の刺突はないが、口縁部文様の充填に列点刺突がみられ、胴部上半の多重沈線が垂下沈線で分割されるなどこれらに類似する点が多い。胴部上半にも渦文がある11(図57の12に同じ)も、2の隆帯の渦文が沈線で表されていると考えれば同様といえる。神明式の後に成立する大杉谷式では刺突による列点が矢羽状沈線に変化することが指摘されているが⁽¹³⁾、当遺跡でも同様に変化するとすれば、口縁部の渦文が沈線で描かれる10の充填文様は矢羽状にな

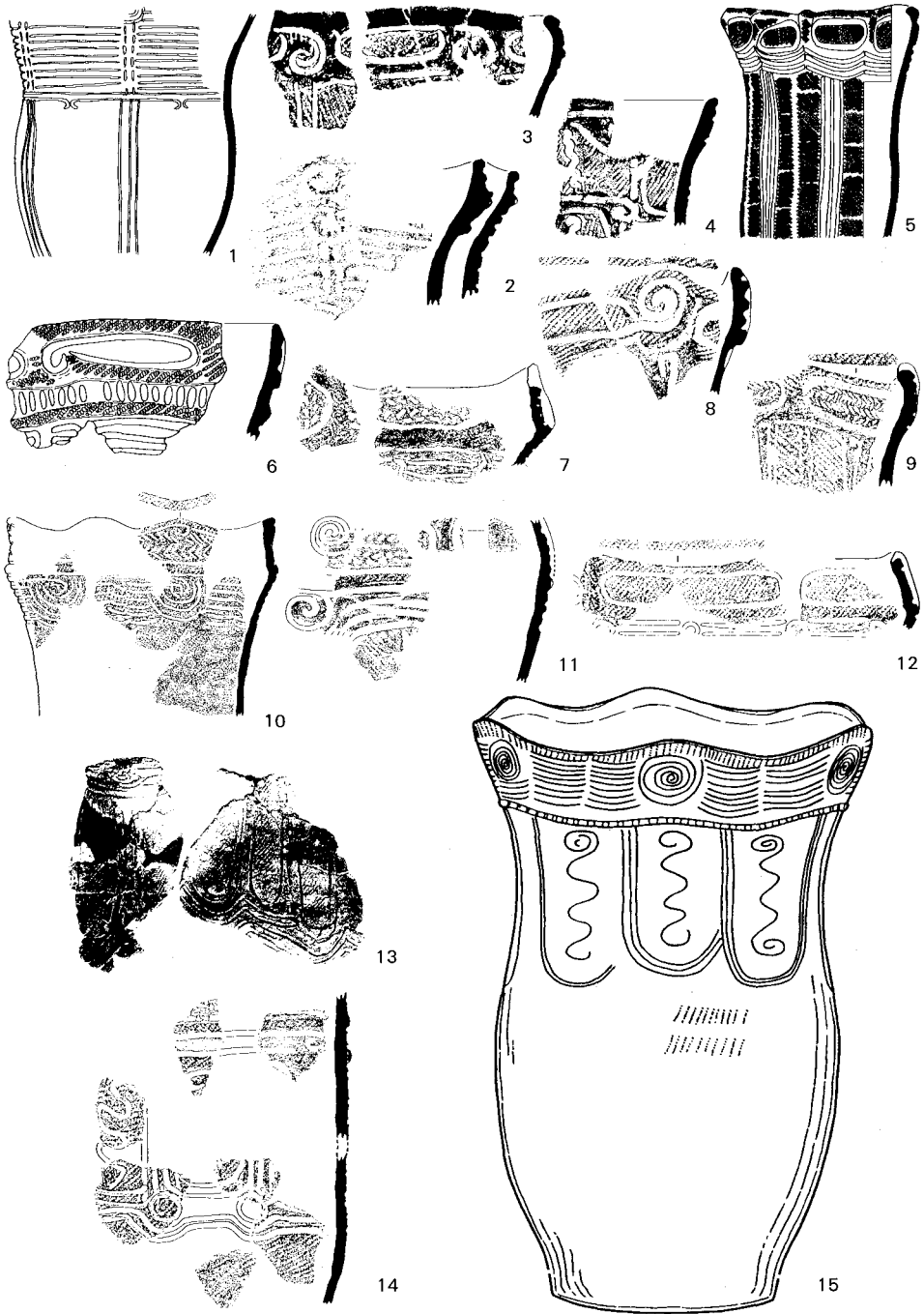


図65 深鉢A1・A2類の祖型と前半期の資料 縮尺不同

っており、11よりも新相を示すといえよう。11の胴部文様について触れると、その意匠は13と同様と思われるが、このように胴部の縦位区画文の下部が横位の多重沈線で遮られる例は、13など近畿地方北部だけでなく14（図57の16に同じ）・15のように同中央部でも、北白川C式の新しくはない段階に散見できる。一方、胴部上半に多重沈線文様をもたないA1類の、主文様部と区画文様部とを隆帯で区分するものでは、従来から指摘されている隆帯と沈線で渦巻文を描く8などについては、胴部の縦位区画文のあり方をはじめ同様の特徴をもつものが、3など東海地方の神明式に確認できる。8以降の展開については、泉の変遷観が今日もなお有効と思われるのでここでは省略する。

A類の主文様をもたないもののうちで胴部上半に文様をもたない9などは、胴部の縦位区画文や蕨手文のあり方は4・8に類似がみられ、東海地方の神明式との関係が考えられる。また、区画文を連ねるという点では、やはり神明式の25のようなものとの関係がうかがわれる。一方、胴部上半に文様をもつ12などは、古府式の方形区画文と咲畑式の連弧文が融合したと解釈できる5のような北陸地方西部の土器との近親性が指摘できる。

深鉢B類 区画文内を充填する矢羽状沈線の施文順序においては、矢をひとつひとつ描くことは少なく、上位の斜行沈線列と下位の斜行沈線列とに分けて描くことが多い。これは両者の総本数の差や上位の沈線と下位の沈線の切り合いのしかたに現れる（図59の35ほか）。こうしてみると、「ハ」字から「く」字への手抜きという視点で時間差を設けることはやや困難である。つなぎ部の表現も、B類の故地と想定された東海地方西部の遺跡では、神明式で20などの橋状把手のものと26などのつまみ状把手のものが相伴することがあるので、時間差を示すかどうかは検討を要するだろう。以上、深鉢B類の変遷についての従来の見解⁽¹⁴⁾は、傾向を把握するには有効であろうが注意も要するといえよう。

さて、隆帯で楕円形区画文を連ねる土器の祖型は泉の指摘⁽¹⁵⁾したように咲畑式などに求められよう。咲畑式の主体的に分布した日本海側から太平洋側にいたるまでの中部地方西部では、後続する神明式に16・17（図59の32に同じ）のように透かしや細沈線と素麵状隆帯の貼付を多用して内面には稜をもつ深鉢が盛行する。18（図56の3に同じ）は内面に稜がなく細沈線を縄文で表現している一方で、正面観がそうした透かしを多用する深鉢のそれと同じであることなどから、16のような土器を模倣したのと考えられ、橋状把手がつまみで代用されるという製作技術上の巧拙の差がうかがえる⁽¹⁶⁾。19（図56の4に同じ）はさらにそれが変容したものであろう。従来からしばしばいわれる、橋部が板状（20～22）から紐状（23）になり、それがつまみ（27）になるという変遷観には、技術差ないし系統

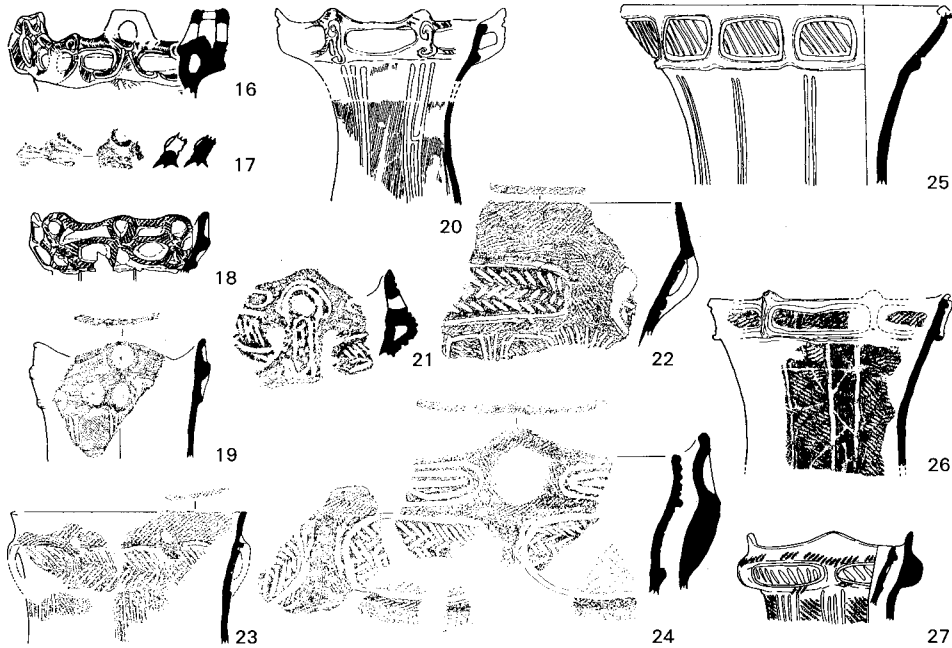


図66 深鉢B類の祖型と前半期の資料 縮尺不同

差を考える余地も残っている。同様のことはつなぎ部の凹点にも当てはまる。この凹点がつなぎ部に組み込まれずにつなぎ部の上の文様帯に位置するものについては、16から21・24（図59の35に同じ）そして23へとという方向性を想定しがちだが、これが時期差を示すとは限らず、出土状況からは21と23との間に時期差を設けることはできない⁽¹⁷⁾。つなぎ部の作出法を系統差とみるならば、つまみ状になっている24・27などは、東海地方の咲畑式B類から変容したと考えられる25や26（ともに神明式）との類似性に注意したい。

深鉢B類で注目すべき点は、胴部上半に多重沈線などの文様をもつものがないことである。深鉢A類ではそうした文様のないものが東海地方西部と深い関係にあることに照らしてみると、深鉢B類は東海地方西部との関係がより深いことが察せられよう。この推察は、北陸地方西部や伊吹山地地域で深鉢B類がほとんど出土しないことに矛盾しない。

深鉢C類 深鉢C類には波頂部の正面形が台形を呈するものと三角形のものがあるが、ここでは今回資料紹介した前者のみを扱う。さて、31（図60の39に同じ）のように土器の内面という目立たない部分にある凹点は、神明式の透かしを多用する深鉢を見通したときの印象を痕跡的にとどめたものと思われる。この特徴を備えたものは近畿地方中央部を中心に広く分布しており、これを北白川C式前半期の広域的な特徴と見なすことができ

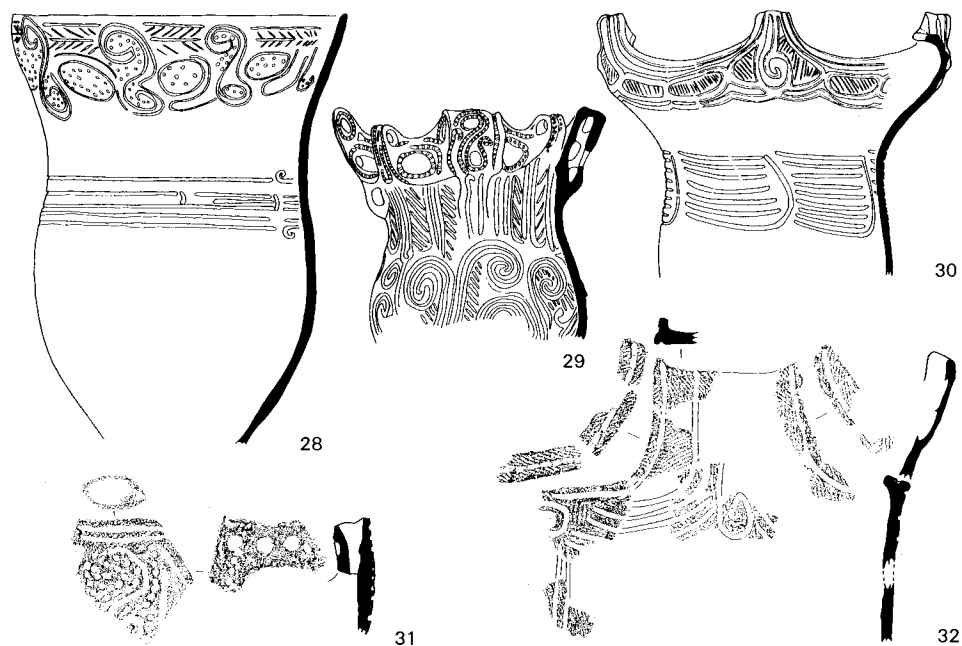


図67 深鉢C類の祖型と前半期の資料 縮尺不同

よう。31の外面の文様については、深鉢C類には32（図61の43に同じ）のようなものをはじめとして波頂部の主文様はS字文やその変容したものが一般的であるという特徴から、東海地方西部の咲畑式などがその起源であろうことは想像できる。深鉢C類の胴部上半には多重沈線が巡るという特徴もこの見通しを支持する。しかし、咲畑式に後続する東海地方西部の神明式では、S字文・区画文の上半が口縁上面の屈折部にせり上がっている30などはあるが、胴部の文様に縦位展開が見られないという違いは大きい。また、29など主文様がS字で刺突を多用する大波状口縁の深鉢も沈線内刺突がほとんどであり、28などS字の主文様付近に刺突を施すものでも大波状口縁でなく水平口縁になるなど、直接の祖型とは言い難い。この型式学的なギャップを技術差とせず時間差とし、また深鉢A類・B類・C類の変化が軌を一にして進行するとするならば、そうしたギャップがあまりうかがえない深鉢A類・B類の初現期に当遺跡で深鉢C類が存在したのか、再考する必要も生じよう。

変遷については、屈折部や口縁部の文様意匠などを型式学的に検討するならば、波頂部の区画文・渦文や波底部の渦文などが簡略化されて磨消縄文に向かうという漠然とした方向性がうかがえるものの、渦文をもたないものや区画文をもたないものなどがあって文様意匠が多様ゆえに単系的な捉え方ができず、時間差を抽出し難い。今後課題が残る。

4 北白川C式成立の背景についての一論

北白川C式の深鉢についてその祖型と前半期の展開を、隆帯や沈線・刺突などによる文様意匠という観点から検討してきたが、成立の背景を探る前に、この型式の土器にかかわるもう一つの要素、各器種に通じる属性である縄文の撚りという目につきにくい要素、について考えてみたい。当遺跡から出土する中期末の土器の縄文はLRが多く、縄文の撚りを規定する1段の撚りはRlである。一方、それまでの里木Ⅱ式の撚糸文の撚りは1段Lrが圧倒的である。このLrからRlへの撚りの変化については既に泉が指摘している⁽¹⁸⁾。さて里木Ⅱ式の撚りは、東海地方西部から近畿地方、瀬戸内地方に至るまでLrが圧倒的に多く、通常はその遺跡でもおよそ7割以上を占めているにもかかわらず、越前地方ではRlの比率が高く、例えば福井県和泉村の後野遺跡の資料ではLrとRlとが半々である⁽¹⁹⁾。後野遺跡では、同時期と考えられる咲畑式も多く出土しており、その縄文は他の地域の咲畑式の場合と同様に2段の右撚り、すなわち1段の縄はLrが多い。この遺跡では後続する神明式や、取組式・鳥崎Ⅲ式の段階になっても、1段の撚りはRlもLrもあまり偏りなく確認される。近畿地方やその周辺の中期末の土器の1段の撚りをみると、東海地方の西部ではLrが主体的である。伊吹山地周辺や湖東・湖南ではLrよりはRlが多いようである。目を西に転じて、大阪湾岸部や丹後・但馬でもRlが多く、瀬戸内でも同様の傾向を示すようである。以上のことから、北白川C式の縄文の撚りは、北陸地方西部で里木Ⅱ式という西日本系の土器を製作する際の流儀ないし癖であった撚り方に帰因すると考えるのが妥当であろう。

さて、北白川C式に先行する時期については、縄文の撚りという北白川C式を構成するほとんどの器種に関わる要素が既に越前地方に存在していたことをいま確認した。また北白川C式の古い段階については前節で、深鉢A類の主文様部と区画文様部との描出方法、文様区画内の充填方法、胴部上半の多重沈線文様、といった要素に北陸地方西部の神明式や、大杉谷式の古い段階のものとの類似を見て取れた。従来から指摘されているように北白川C式が東日本からの影響で成立した土器型式だとすると、こうしたことから北陸地方西部にもその起源の一端を垣間見ることができよう。その一方で、深鉢A類の醍醐系と考えられる胴部上半に横位展開の文様をもたないものについては、北陸地方西部というより東海地方西部の特徴に符合することが確認できた。また、東海地方西部と北陸地方西部の神明式にみられる透かしを多用した深鉢が祖型と考えられる深鉢B類については、大杉谷式にはその存在が確認できないのに対し、神明式そのもの(図59の32)やそれが変態した

おわりに

ようなものの存在が認められる当遺跡では深鉢B類がその後も北白川C式の組成の一端を占めるなど、東海地方西部に親しい点もある。さらには、深鉢C類の成立についても、明確ではないものの、やはり東海地方西部の土器とのつながりを指摘できた。

北白川C式成立問題については、東海地方さもなくば北陸地方という中部地方西部の単一地域に排他的に深く結びつくという捉え方ではなく、土器群や個体を構成する多様な要素に応じて複数の近縁地域との関係があるという見方も可能なことを示した。このことは、北白川C式の成立が東日本の縄文人の大規模移動に起因することをすぐに否定するものではないが、様々な「刺激」が複雑なかたちで近畿地方に及んだことを物語るといえよう。

5 おわりに

これまで漠然と東日本からの影響としてすまされることが多く、具体的な検討はあまり充分ではなかった北白川C式の成立問題について、北白川追分町遺跡の資料の再整理を機に分析項目を細かくして取り組んでみた。今回は東日本的要素の影響という観点から、深鉢を中心にしてどの要素が中部地方西部のどの地域と近いかということに焦点を当てて検討した。個体としての土器を要素にわけて分析することはときにその実態を不明瞭にすることに陥りがちだが、それはこうした分析そのものに起因するのではなく、その活用法に問題があるに過ぎないと思われる。北白川C式の研究に関する限り、出土状況には恵まれないが資料の豊富な現今、こうした細目的な分析に再び取り組むことが肝要と思われる。

本稿は、1994年に提出した修士論文の、型式学的検討による文様意匠比較およびそこから導く地域間関係の解釈に関わる部分を基に、出土状況の検討にはあまり立ち入らないで議論を展開したものである。土器研究では出土状況が型式学的解釈に優先されてよかろうという立場にたって研究を進めているが、研究の現状と資料の重要性とに鑑み今回は敢えて型式学的な解釈を中心に据えてみた。本稿を起すにあたり、多方面の方々に多大なるご協力をいただいた。末筆ながら、各位に謝意を表したい。

〔注〕

- (1) 泉拓良「中期末縄文土器の分析」(泉拓良ほか編『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』北白川追分町縄文遺跡の調査 京都大学埋蔵文化財研究センター)、1985年
- (2) 泉拓良「北白川上層式土器の細分」(泉拓良・岡田保良編『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』京都大学埋蔵文化財研究センター)、1980年
- (3) 京都大学北部構内 BF31 区調査班「北白川追分町遺跡の発掘調査」(清水芳裕編『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター)、1987年

北白川追分町遺跡出土の縄文土器

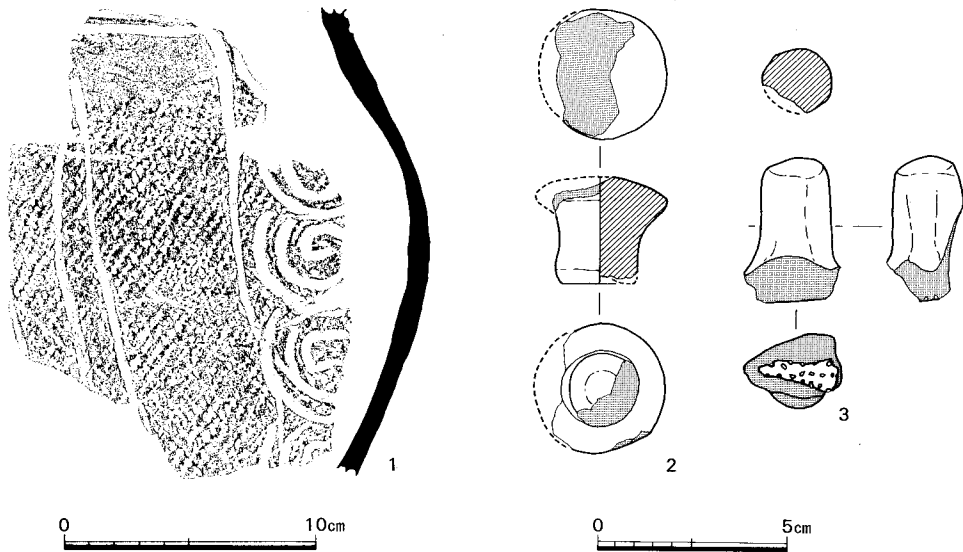


図68 後期の土器と土製品 (1 後期中葉の深鉢 1/3, 2 耳栓 3 スタンプ様土製品 1/2)

- (4) 今回の再整理では北白川上層式1期の胴部片も1点確認できたので図示しておく(図68の1)。
- (5) 京都大学北部構内BF31区調査班「北白川追分町遺跡の発掘調査」(前掲)
- (6) 土器以外でも、東日本的要素とされる耳栓とスタンプ様の土製品が出土した(図68の2・3)。
- (7) 泉拓良他「遺物」(泉拓良ほか編『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ 北白川追分町縄文遺跡の調査 京都大学埋蔵文化財研究センター』, 1985年)
- (8) 堅田直『平遺跡調査概要』考古学シリーズI, 1966年。ただし、この概要報告時点では、平式は「やや厚手の土器」と捉えられている。
- (9) 小島俊次「近畿」(杉原莊介編『日本考古学講座』3 縄文文化), 1956年。
- (10) 泉拓良「西日本縄文土器再考 - 近畿地方縄文中期後半を中心に -」(小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考』), 1982年
- (11) 泉拓良「中期末縄文土器の分析」(前掲)
- (12) 最近こうした視点から中期末の土器の検討を重ねている矢野健一の議論も、北白川C式に関しては時間関係に重きがあり地域間関係についてはあまり力点を置かないようである。(矢野健一「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』16, 1994年)
- (13) 工藤俊樹「右近次郎遺跡出土中期後葉土器群の検討」(工藤俊樹編『右近次郎遺跡Ⅱ』 大野市教育委員会), 1985年
- (14) 泉拓良「中期末縄文土器の分析」(前掲)
- (15) 泉拓良「中期末縄文土器の分析」(前掲)
- (16) 時間を経て退化したとみるならば退化以前の形態を呈するものがこの遺跡から出土していてもよいはずだが、そうした形態のものは搬入品と思われる17しか出土していない。
- (17) 北白川追分町遺跡の住居址からは、21の土器と23に酷似した土器とが相伴している(清水芳裕「京都大学北部構内BF33区の発掘調査」(浜崎一志編『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター), 1984年)。
- (18) 泉拓良「中期末縄文土器の分析」(前掲)
- (19) Makoto TOMII 'The analysis of pottery and its interpretation' (1995年のシンポジウム "From Jomon to Star Carr" の要録掲載分として投稿済)

図65～67で用いた資料の出土遺跡

1・2.後野遺跡(福井県和泉村), 3・4.神明遺跡(岐阜県美濃加茂市), 5.上平吹遺跡(福井県南条町), 6.戸入村平遺跡(岐阜県藤橋村), 7.北白川追分町遺跡BF31区(本調査区), 8.北白川追分町遺跡BG31区, 9・10.北白川追分町遺跡BF30区(それぞれ同一個体が本調査区から出土), 11.本調査区, 12.北白川追分町遺跡BF30区(同一個体が本調査区から出土), 13.岩の鼻遺跡1986年度調査区(福井県名田庄村), 14.本調査区, 15.布留遺跡1983年度調査区(奈良県天理市) 16.戸入村平遺跡, 17～19.本調査区, 20.宮之脇遺跡B地点(岐阜県可児市), 21.北白川追分町遺跡BF33区, 22.本調査区, 23.北白川追分町遺跡BF30区(同一個体が本調査区から出土), 24.本調査区, 25.神明遺跡, 26.宮之脇遺跡B地点, 27.北白川追分町遺跡BG31区, 28・29.炉畑遺跡(岐阜県各務原市), 30.宮ノ後遺跡(愛知県足助町), 31・32.本調査区

なお,本文中に掲げた実測図は,先学の示された図や写真などを参考にして作成・補筆したものを
用いたので,誤認等の責は一切筆者が負うべきものである。

図65～67で用いた資料の出典

後野遺跡

桜井隆夫「土器」(橋本幹雄編『後野遺跡』和泉村教育委員会), 1978年

神明遺跡

増子康眞・伊藤克司「遺物」(増子康眞編『神明遺跡』美濃加茂市教育委員会), 1971年

上平吹遺跡

桜井隆夫「遺物」(山口充・桜井隆夫編『上平吹遺跡』北陸自動車道関係遺跡調査報告書第12集福井県教育委員会), 1977年

戸入村平遺跡

武藤貞昭ほか「縄文時代の遺構と遺物」(武藤貞昭編『戸入村平遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第4集 岐阜県文化財保護センター), 1994年

北白川追分町遺跡BG31区

泉拓良ほか「遺物」(泉拓良他編『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』北白川追分町縄文遺跡の調査 京都大学埋蔵文化財研究センター), 1985年

北白川追分町遺跡BF30区

千葉豊ほか「縄文時代の遺跡」(千葉豊編『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』京都大学埋蔵文化財研究センター), 1998年 (本報告第3章に所収)

北白川追分町遺跡BF33区

清水芳裕「京都大学北部構内BF33区の発掘調査」(浜崎一志編『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター), 1984年

岩の鼻遺跡

網谷克彦「遺構とその出土遺物」(網谷克彦・畠中清隆編『岩の鼻遺跡Ⅱ 1986年度調査概報』福井県教育委員会), 1987年

布留遺跡

竹谷俊夫「布留縄文遺跡の調査 中間報告」(港北ニュータウン埋蔵文化財調査団『称名寺式土器に関する交流研究会』), 1985年(横浜市埋蔵文化財センター『調査研究集録』第7冊に再掲)

宮之脇遺跡

吉田英敏「宮之脇遺跡B地点」(吉田英敏編『川合遺跡群』可児市教育委員会), 1994年

炉畑遺跡

大江 命『炉畑遺跡』各務原市教育委員会, 1973年

宮ノ後遺跡

谷沢靖ほか「宮ノ後遺跡」(杉浦知編『尾張三河地方の考古資料図録 谷沢靖氏寄贈資料Ⅰ』刈谷市教育委員会), 1993年